

# その夜のこと

水野 仙子

上

『こゝから新田高山の』

こゝから新田高山の

『庄屋の娘はおかのとて』

庄屋の娘はおかのとて

『おかのが可哀いや殺される』

おかのが可哀いや殺される

『下には緋縮緬の長襦袢』

下には緋縮緬の長襦袢

『上には白無垢着重ねて』

上には白無垢着重ねて

とん／＼とん／＼と調子よくお縁側にはねる  
手毬てまりの音が、春まだ若い日ざしに溶け入るや

うに續ついて居るのに交まじって、二つの聲こゑが交かはる  
／＼に唄うたひ綴つって行きます。

近いお部屋の机にもたれて、ものを書くともなしに筆ふでならしをして居られた博士の奥様は、つひそれに興きょうを誘いはれてさら／＼と美しいお筆ふででお手許てもとの白紙しろがみにその唄うたを染そめて行きました。

『銀の簪かんざし落おしざし』

銀の簪かんざし落おしざし

『蛇の目の傘からかさつんとさし』

蛇の目の傘からかさつんとさし

『天上見ればとと様』

天上見ればとと様

『拜をがもとしたれば雲うみが出た』

拜をがもとしたれば雲うみが出た

『その雲何雲邪見雲』

その雲何雲邪見雲

『雲うみが邪見よみでなければども』

雲が邪見でなければ

『吾が身が邪見で拜まれぬ〜』

吾が身が邪見で拜まれぬ〜

唄の聲がやむと手毬の音もはたと止んで互に顔を見合したらしく、

『ホ、、、』と優しい笑ひ聾が聞こえましたが、

『さ、も一度今度は御一緒に唄ひませう』と、

『こゝから新田高山の』

『庄屋の娘はおかのとて』と今度は聾を揃へて唄ひ出しました。

博士の奥様は筆を擱おくにつこりして机の前をはなれましたが、足音靜かにすらりとお縁側に出てまゐりました。そこには小間使ひの千枝が小さなお嬢様のお對手あひてをして毬唄をうたつて居るのでした。

『さやちゃんや』と先づお嬢様の名を呼んで目許の笑みを振りかへつた千枝の顔にそゝい

で、

『面白い毬唄ですね。どの地方のかしら』と帯の間に両手を入れて二人の後に佇たゞずまれました。

『お母様、お母様、あのね、私ね、千枝にね毬唄を教をそはつてるの。千樹はね、お祖母様ばあから教はつたんですつて、昔なんですつて』と八つばかりになつたお嬢様は例の口早やにお母様の袖をひいてかう申しますと、

『あゝさう、面白い毬唄ですことねえ』と緩く跣かじんで足許に轉ころげて來た手毬を手に取ると『銀の簪落しざし、蛇の目の傘つんとさしつていふのホ、、、』と指輪の光る手で少しばかりついて御覽になりましたが、毬は意地わるく外それてころ／＼とお縁えんをすべつて庭先に轉ころげて行きました。

『おや失禮、駄目ねお母様は下手へたてホ、、、』千枝が庭下駄を履いてそれを取つて來ますと

『ねえ千枝、お前のお祖母様はお歌が上手だったさうだけれど、お前はそれに就て何か覚えは無いの？一體お祖母様に死に別れたのは幾つの時だったの？』と物優しくお問ひになりました。

なにしろまだ十四になったばかりの千枝を小問使ひには少し躊躇はれたのですが、世話をした出入りの者が、父もない母もない可哀ひさうな身の上といふことを一寸話したので、子供が多勢といふのではなし、姪でも世話をする位の積りでと人の面倒のいゝ奥様は千枝に来て貰ふやうに取計らったのでしたが、どうして／＼年こそ行かね體こそ小さいが、御用の仕振りにも影日向なく、何處やらの取り廻しが目聴くて外の召し使ひの間にも目に立つ程なでした。それで居て悪伶俐いところも見えず、何日か奥様の書き反古をお部屋の掃除の折に拾つて、夜なく／＼そつと手

習ひをして居たのがお目にとまって、笑ひながら美しいお手蹟のお手本を書いて下すつたばかりでなく、手づから筆を持ち添へてあゝかうと教へて下さることも度々でした。

文學博士秦得人の夫人は、閨秀作家として聞こえた方で、秦千代子といへば兎に角人の少くない文壇の女性間に其名を尊ばれて居ります。

で奥様は常々千枝が心掛けを愛でて殊の外目をかけて居りましたが、其身の上のことに就ては聞かう／＼と思ひながらも、千枝は我から話し出して人の憐憫を乞はうとするやうな女でもなかつたので、今まで殊更にそんな折もなかつたのでした。

『確かお前の家は士族だとかいひましたね』と奥様は重ねてお尋ねになりながら、さういへば何處やらに氣品の見える千枝の顔を凝乎と御覧になりました。

『お祖母様に死に別れたのは私が十一の春で  
ございます』

千枝は忘れるともなしに忘れて居たその當時  
のことを思ひ出したやうに、言葉少くなにか  
う答へたまゝうつむいてしまひました。語る  
にしてはあまりに儂いその頃のことか夢のや  
うに偲ばれるのでした。

## 中

『オ、寒む！　なんだかぞく／＼する晩だこ  
と』

と老母はやがて獨り言ともつかず言つて肩を  
すぼめた。膝の前の焜爐には赤々とした炭火  
が淡い炎をたて、金網を撫で、居る上に、脹  
れようとしては押へられ、反つては矯められ  
つゝ一枚二枚と狐色になつて行く、それは老  
母が手の火箸で打ちかへされ／＼して焼けて  
行く煎餅で、それがこの老母のたゞ一つのな

りはひなのであった。少し離れた場所に蜜相  
の空箱を据ゑて、古雑誌のほぐれを拾ひ讀み  
ながら、手際な手付きで袋を張つて居るのは  
十ばかりになる孫娘で、かけがひのないたつ  
た一人の祖母と一人の孫娘、晝はおもてに少  
しばかり並べた鹽煎餅を、足止めて買つて行  
く人も稀れな、だからこそ路次裏の長家の一  
つにこんな母子が住んで居ようと誰もその素  
性などを知るものはなかつた。

障子の破れ間から吹き入る風を枕許に拒い  
だ屏風には、見事なお家流の筆蹟で歌二首ば  
かりの色紙が張られてある。それがこの煎餅  
を焼く老母の嗜みであるのを知つたなら誰も  
この人の昔を偲ぶに難くはないであらう。

孫娘はもの心のつき初めた十か十一、淋し  
い二人居に馴れても猶、時々父は母はと思  
はぬではないが、何故かそのことに就ては父  
母は無いとばかりで祖母は多くを語つてくれ

ぬ。死んだのか或はまだこの世に生きて居るのか、曾ては兄を持つて居た身か妹はあるのか、父と母とは今でも一緒か——と生き死

にさへ話してくれぬ模様をみても疑はれるのは父母のこと、小さな胸にあれこれと想像しては折に觸れ事に觸れて尋ねてみるのだが、老母はいつもそれを外して若い時の物語り、華やかな娘時代の思ひ出などをのみ語って、はては若やいだ聾で手毬唄などを唄って聞かせる。風の強い夜や雪の朝など、孫娘は凋びた祖母の乳房を弄びながら、遠い／＼寒い國の昔の物語りを聞きながら大きくなった。都に育ちながら言葉訛りのある手毬唄なども幾つも覺えた。

路次おもての天ぷら屋から夥しい匂ひが漂つて來るのにつれて、店に集つた若い者達がやつて居る藤八拳の賑はしさか止みさうもなく續いて居る。

『オゝ寒む、今夜はそんなに寒いかい』と老母は再び首を縮めた。

『そんなでもないわお祖母さん、どうしたんでせう、風邪でも引いたんぢやなくつて?』  
『さうかも知れないねえ、いやに寒む氣がする』と眩きながらも猶元氣よく、

『お祖母さんも年が年だからどうも此節は弱くなつたやうだよ。若い時にはお醫者の藥なんてものは一度も飲んだことがなかつた。お祖母さんが若い時には大きな女でね、それは肥つてゝね、だから力持ちなことも力持ちだつたよ』と話はまたいつか若い時のことにつつて行つた。

『氣丈だつたこともお家中の評判でね、まだお前なんかには聞かしたくない事なんだが、いつか笹部といふ人の家に歌留多會があつてね、その時大騒動があつたんだよ。お今さんといふ娘が殺されたのさ。綺麗な人

でお家中の評判だったがああの時にさうねえ十七位だったらうよ。その晩は島田に結つて大きな花簪をさして居たっけ。お祖母さんと並んでね、話しをして居たのが一寸中座をして便所はいかりかなんかに行つたんだよ。すると間もなくきヤツといふぢやないか、一座の人がみんな顔を見合せてね。すると誰かぢやっ大變だくといふだらう。後から斬りかけられて振りかへつた途端に眉間みけんを一太刀ひとたちやられてね、それでも簪に切つ先が觸れたとみえてそれはさう大創おほきずでもなかつたが廊下あふむのところおほこんざつに倒れて居る、さあ上を下への大混雑おほこんざつで』

『殺されたの?』と孫娘は袋張りの手をとめて心配さうに老母の顔を見上げた。繰りかへしくする祖母が昔の話も、こればかりは初めてのやうな氣がしたので、

『あゝ、綺麗な死に顔でね、色の白いところ

に眉間の創きずが赤くかすつて、お祖母さんが傍そばによつて觸さわつてみた時はまだ暖あつたかくつてぐうんぐんと體からだがのびて居たっけ。その傍にお前ひとり、も一人人が倒れて居るんだもの。お今さん御免ごめんつて言つた聲を誰か聞いたつてさ。かへす刀で自分の腹を突きさして死んだつたんだよ。袴はかまの上から一突きついたらだけれども見事な死に方で臟腑ぞうふが出て居ました。』

『人を殺して自分も切腹したの?』

『あゝ、さあ大へんな騒さわぎ。その頃はもう切つた切られたなんてことはさうなくなつた頃ころだったからね、みんなが慌あわて切つて居るから兎も角お祖母さんがお今さんを抱おこき起してみるともう駄目、その時も若いのに一番お祖母さんがしつかうして居たつて噂うはさされましたよ。』

さも其頃そのころが偲しのばれるやうに老母は暫しばらく手をや

すめて小さな洋燈ランプの光りを眺めて居たが、『お祖母さんももう七十八、もう二年で八十になります』と眩くやうに言った。

それから小一時間と経たず、木枯こがらしじみた風ばかりが外面そとに驅け廻り行く頃、

『あれい！誰か早く、お隣りの小母さん早く来て下さいよう！』とけたましく孫娘の叫ぶ聲が起った。

いつもになく寒さむ氣けがする／＼と云ひ續けて居た老母は、いぎこれから暖あたい床にはいつて孫娘に昔の話の續つきでもしようと思つたと立ちあがつた途端に、うむと云つたまゝぱったりと後ろざまに倒れたのであつた。

## 下

右は小間使ひ千枝が奥様に身の上のことなど尋ねられた晩に、その夜のことがあり／＼と思ひ出されるまゝに、書き綴つたものであ

ります。どうかすると書かうと思ふことも思ふやうに書けないうらみが見えますけども、年も行かぬによくこれだけ書けたてはありませんか。常々博士夫人のお作が雑誌などに出るたびに、千枝はそれを拜借してはよく讀み耽かつて居りましたが、千枝にもどうやら文筆の才があるものとみえます。

博士の奥様もひどく感心なされて、末たのもしいと博士にお話しになりました。それにしても千枝が親といふものは一體どういふ人物なのでせうか。

博士の奥様と共に私も尼子あまこ千枝といふ一人の少女に向つて多大の望ぞくみを屬して居ります。

——をはり——

### 【入力者注】

底本は総ルビですが、ルビは一部のみ残しました。

底本と行を合わせるために半角スペースを挿入した箇所があります。

初出・底本…「少女の友」第四巻四号

明治四十四(1911)年三月

入力…小林 徹

公開…令和六(2024)年九月二十六日

修正…令和六(2024)年九月二十七日

リンク…[水野仙子作品年譜](#)に戻る